IFORS'90 + CECOIA 2 と欧州

柳井　浩（慶応義塾大学），山田　善靖（東京理科大学）

1990年6月下旬ギリシャアテネ市において行なわれたIFORS'90ならびに7月上旬フランスパリ市で開催されたCECOIA 2をめぐって視察団が結成され，6月22日成田発，7月10日帰国，19日間の日程を終えた．参加者は途中出入りがあったものの，20数名．団長には，松田武彦先生（産能大学学長）をお願いし，企画・運営には本学会の国際委員会が中心となってこれに当たった．

1）IFORS'90，アテネ市，ギリシャ

旅程の前半は，アテネ市で開催された第12回IFORS大会に参加することであった．会場はアテネ市の中心から約2km離れたインターコンチネンタル・ホテル．われわれ一行の宿舎はそこから200mほど離れたレドラ・マリオット・ホテルであった．

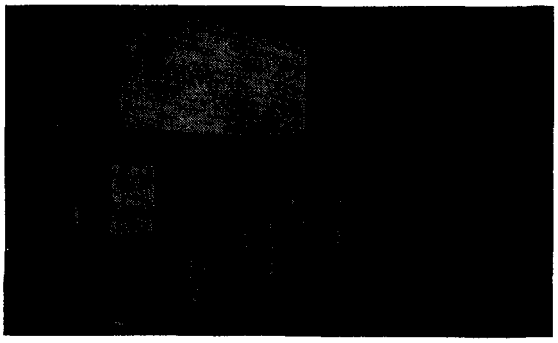
IFORS大会の会期は6月25日（月）から29日（金）まで．27日（水）は1日がかりの遠足のため，残る4日間が研究発表にあてられた．600を越える予定発表件数を11のパラレル・セッションに分け，これに12のワークショップを18本の流れに乗せてゆくという大規模なもので，その参加者総数は640名．盛会であった．

組織委員長のBlesseos教授は，開会式において，

「ギリシャはまさにヨーロッパ文明発祥の地である．皆さんがORワーカーとして日常使っているanalysisとかstrategy等の言葉も元をただせばギリシャ語である．しかし，ギリシャは過去ばかりではない．経済，公害等々多くの現代的な問題をかかえている．それだからこそ，この大会のテーマもOR:Wisdom for the problems of todayであるのだ．そして，その問題とはなにか？　ギリシャ神話に出てくるスフィンクスの謎の答がそうであったように，それは人間そのものなのだ」

と述べられた．さらにそれを承けてIFORS会長Pierskalla教授が，

「今日，ORには新しい概念や手法が次々と出てきている．それと同時に，問題も多くなってきた．環境問題，健康維持の問題，教育問題等々である．これらに対応するのにわれわれはORの定義そのものをさらに広いものにしてゆく必要がある」



と述べられたのも，この大会がアテネ市で開催されたことの意義を物語るものであろう．

研究発表

600件にものぼる発表をここで概観することはもとより不可能である．ここでは，今回の大会に特に設けられた

「ギリシャ哲学とOR」

のセッションを覗いてみることにしよう．

まず第1の発表はこのセッションの議長である前会長H. Müller-Merbach教授（西ドイツ）による「現代とストア派哲学」と題するものであった：第3期，ストア派の提言は，現代にも通じる内容をもつものであり，現代のORアナリスト，経営者，一般市民のルールとして役に立ち得るものだという主張のものであり，教授は，第3期ストア派の提言を紹介の上，そのひとつひとつを現代のOR活動にあてはめて解説，これを実行することを提言した．――結局のところ，かなり倫理主義的な印象が残った．

次は，スエーデンのP. S. Agrell教授「プラトンとその前の時代」と題するものであった：ソクラテスやプラトンが知識を産みだすのに用いた方法は，マイエウティケーという産婆術を意味するギリシャ語であらわされる．これは，他の人を助け，その問題を定式化し，その本質的部分と位置づけを明らかにするという意味で，いわば現代でいうOR活動を意味する．しかし，マイエウティケーの概念は，現代でもそうだが，当時でも，必ず

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

しも明確なものではなかった．そこで，このマイエウティケー，ひいては，ORの応用可能性を論議するためには，いろいろな種類の“産婆術”的方法の差異を明らかにすることが重要である．この点をはっきりさせなければ，科学としてのOR方法論は，厳密さを求めるだけのいわゆる理論派と，漠然たる概念をもてあそぶだけの学派の間の無意味な争いを続けることになろうというものであった．——ORのアプローチをさらに方法論的に分析してみることが必要だという主張であろうか？

最後は地元ギリシャのA. A. Sissouras, M. Lambrau両教授による「デルフィの神託——OR的方法と神秘化」というものであった．デルフィの神託という話は，日本でもよく耳にするところではあるが，これはいわば，現代のコンサルタント活動に相当するものであったという．ここでは，市や市民の求めに応じて“分析と合成”というプロセスが行なわれ，予測モデルが作られたらしい．それを頼みにゆく市民の側でもその辺を心得ていたようで，たとえば，方々の神託を求め，これを照合することすらしていたというのである．

また，これらの助言が神秘的な詩の形で与えられたことは，よく知られているが，これも，ひとつには，あまりあてにならない助言や予測で誤りを犯す危険に対する逃げ道でもあったし，また，政治家が都合の良いように解釈する余地を残す手段でもあったという．

今日のMS/ORの実務の背景をこのような面から見てみるのもまた一興ではなかろうか？　と発表者は皮肉に結ぶのであるが，いかがなものであろうか？

これらを通じて，歴史の話は興味深いものであったがそこでどうすべきかという点については，残念ながらあまり良いヒントは得られなかったように思う．いかにもヨーロッパ人好みのセッションであった．

アテネ市街と遺跡の数々

アテネの夏は暑い．6月でも日中気温は35°Cを超える．空には一点の雲もない．空気は乾ききっている．街を歩くにも，キオスクで買い求めたミネラル・ウォーターの瓶をかかえて，ひっきりなしに飲んでいなければ渇きに耐えられるものではない．しかし，会場は冷房のきいた近代的ホテルである．だから，会場にいるのが一番良さそうなものなのだが，アテネ市の魅力はそれ以上に強い．

アクロポリスやアゴラ，ゼウスの神殿は3000年の歴史を語りかける．博物館にゆけば，ソクラテスの追放にも使われたような陶片（オストラカ）を目のあたりにすることができる．街のそこここには，石造りのビザンチン様式の教会が残り，今でも，礼拝に人が訪れる．重なり合った歴史の上に建てられた現代のアテネ市も，中心部シンタグマを見れば，石造りのビルが立ち並び西ヨーロッパの都会風である．しかし，ほんのわずか離れた旧市街プラカのあたりには，観光客相手のみやげ物屋の，背の低い建物がひしめいて，この町の別の顔を見せている．

皮細工，じゅうたん，石膏細工，陶器，イコン（聖画），銅細工，金銀細工等々みやげ物は種類も量も豊富である．さらに進んで蚤の市に足を踏みいれれば，終戦直後の東京の場末のよう．ありとあらゆる種類の品物が並べられ，羊の肉を焼く香ばしい煙が流れる．街角では風体の良くない男達が大声で怒鳴りながらバクチにふける．夜にもなれば，外国人には少々危険な地域だという．単なる旅行者には，結局のところ，表面的なことしかわからないのではあるが，現代ギリシャ人のいきいきとした生活ぶりを見た思いであった．

夜の食事は，日も暮れて，だいぶ遅くなってから始まる．アクロポリスの麓のレストランの屋上から，イルミネーションに映えるパルテノン神殿を見上げて食事をするのも，この町を訪れる観光客の楽しみの1つである．

ようやく渡りはじめた涼風に頬をなぶらせ，僧院で醸されたという豊潤なワインや，水をまぜると白濁する香りも強いウゾなどで喉を潤しつつ，オリーヴ油とオレガノで料理した新鮮で豊富な海の幸・山の幸を賞味する．傍らでかなでる，賑やかなうちにも，一寸もの悲しいギリシャの民族音楽と踊り．——このような宴が夜半までつづくのだ．

エーゲ海クルージング

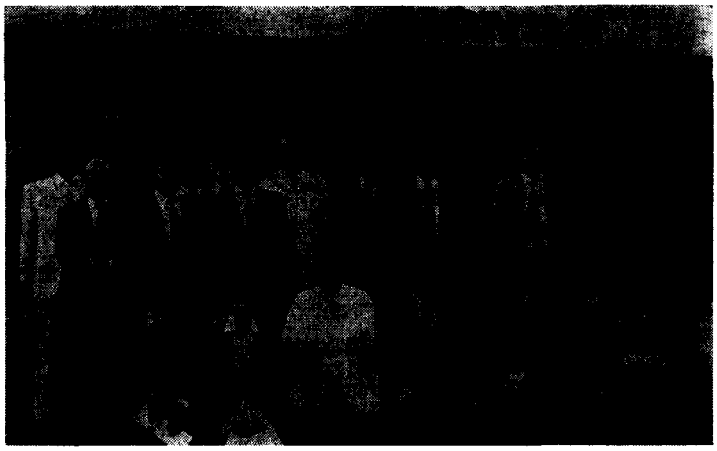
27日(水)の1日は，IFORS参加者の全員と希望の同伴者が参加するエーゲ海クルージングにあてられた．IFORSの大会では，可能なかぎりこの1日行程のクルージングが企画される．もともと，国際会議は，各国の研究者が学問的なレベルにとどまらず，人間的なレベルにおいて交流し，親睦を深めるという目的をもつ．そこで船という，限られた，しかしその中では自由に歩きまわれる空間に1日全員を閉じ込めておくことが最も効果的な方法ということになる．

カタイ話は止めておこう．とにかく，紺碧の空の下，葡萄酒色の海と詩人ホメーロスが歌ったエーゲ海に船を

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

浮かべ，島々をめぐるこの1日こそが，この大会のハイライトでさえあった．

エーゲ海の島は数多い．名も知れぬ小島が次々と現れる．灼熱の太陽の下，地味の痩せた地肌の所々に灌木が生えるだけ急な斜面では岩肌がむき出しになる．谷間に漁民の集落が見られる．壁を真白に塗った石造りの家々がまぶしい．自動車も通れぬ狭い坂道をロバが荷を運ぶ．



われわれの船が停泊したのは，ヒドラ島とポロス島．ヒドラ島の港は狭い湾をなしており，両岸には古い大砲がずらりと並んでこちらをにらんでいた．接岸上陸の可能性のある場所の少ないこの島の重要拠点であったのであろう．港には‘TAXI’という札のついたモーター・ボートがもやってあり，これまた，島における海上交通の重要性を物語っていた．

一行は港のあたりをぶらつく．みやげ物屋を覗く．冷たい飲み物で喉を潤す．水着に着替えて海につかる者もある．海水は，日本近海より塩分の濃度が高く，体が軽く浮くように感じられたという．

午餐のあと，サロンではギリシャ音楽と民俗舞踊．時の経つのも忘れているうちに，船は帰路につく．やがてアテネに近づくにつれ，漁港ピレウスの後に沈もうとする夕日にサロニカ湾が赤くそまっていた．

諸　会　議

IFORS 大会会期中，研究発表の他にいくつかの会議が開かれる．IFORS それ自身の運営上の会議，アメリカ・カナダ，ヨーロッパ，アジア・太平洋等々地域の会議等である．

IFORS の運営上の問題は各国代表を集めて，前後2回にわたって行なわれる総会（IFORS Meeting）で討議される．議決は郵送による投票で行なわれるため，この会議は活動報告，議案の説明等にあてられる，今回，会長の施策として報告されたのは，IFORS Specialized Activities Committee の件であった．これは，3年に1回ひらかれる IFORS 大会の他に，いろいろな専門分野に関する国際会議を開くために，会長が副会長の Brans 教授（ベルギー）に依頼して組織したものである．1991年3月にベルギーで開催されるＤＳＳに関する国際会議もその活動の一環である．このことは，IFORS のいささか悪化した財政状態の改善をもくろむものでもある．また，IFORS の財政状態の改善はこれでも不充分であり，同時に，各国ＯＲ学会の分担金をかなりの程度値上げしたい旨の議案が提出された．

一方，APORS（アジア・太平洋地域ＯＲ学会連合）の理事会では，新しいメンバーとしてフィリッピンＯＲ学会の参加が報告され，会長の del Rosario 夫人の挨拶があった．この会議の主たる話題は来年に北京で開催が予定されている APORS'91 のことであり，徐 APORS 会長（中国）は，準備が着々進行中である旨を報告，各国の参加・協力を呼びかけられた．これに対して，大多数の国は努力を約束したが，オーストラリア代表の Kavanagh 教授は協力そのものが不可能になるおそれがあると報告された．すなわち，同国ＯＲ学会会員中，天安門事件以来の中国政府に抗議する意味で，APORS '91 に対する非協力を主張する大きな勢力があるということであった．

さらに，APORS '94 の開催地についてもその可能性をめぐって意見の交換がなされた．伏見代表（日本）は，北半球がつづいていることを理由に南半球における開催を希望された．

2）工場見学と CECOIA 2（パリ），フランス

旅程の後半はフランスである．パリに宿をとり，CECOIA 2 の会議に参加するかたわら，工場見学をした．

アテネを源流とすれば，パリは近世以来現代に至るまで，ヨーロッパ文明が華を咲かせてきた場所である．現在，フランスの社会・経済の発展は西ドイツに遅れをとり，多少の焦りが見えるとはいえ，パリは依然としてパ

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．

リである．コンコルド広場では革命記念日の準備が進められており，街は観光客とスリで賑わっていた．

さて，CECOIA 2 の本会議が始まるまでの2日間をわれわれ一行は工場見学にあてた．

ルノー，ドゥエ工場

第1日は，ルノー公団の自動車工場．場所は Douai というベルギーとの国境近くで，パリ市からバスでここまで移動するのに数時間を要する辺鄙な所であった．事前に東京のルノー出張所を通じて，こちら側の参加者リスト，要望など細かい問い合わせがあり，詳しく回答しておいたのではあるが，どうも現地との連絡が十分でなかったようであった．説明者も観光客相手の係で，専門的な質問，特に，計算機関連の質問には答えられず，この点は，一行を多少失望させた．

しかし，工場そのものは最新の設備を誇る近代的なもので，ロボットはドア越しの内装作業をこなしていた．従業員2000名，プレス工場だけでも800トン/日の鉄を消費する大規模なものであるばかりでなく，整理・整頓と清掃の行き届いた工場であった．所々に置かれた部品運搬車には KANBAN A. G. E. Retour——等と記されたカンバンが張りつけられ，カンバン方式の普及のほどを目のあたりにすることになった．

ホンダ，オルレアン工場

第2日は，オルレアン郊外の工業団地にあるホンダの芝刈機工場を訪問した．芝刈機とはいえ，ホンダのエンジンを装着した立派な4輪車である．このような品物は需要の中心地でつくるべきだというホンダの考え方にもとづいて設立された現地法人であり，決して大規模なものではないが，1989年には累積製造台数25万台を祝い，現在フランスにおける芝刈機市場の20%を占めている．現社長の平井氏は，むろん，日本の方であるが，前社長はフランス人である．ここにも日本企業を母体とする企業ではあっても，現地に溶け込もうとする強い意欲をうかがうことができた．平井社長はみずから，われわれの応接にあたられ，この点を強調されると同時に，日本式経営，ホンダ流のＱＣ活動などを，フランスの風土になじませるにあたっての，数々の問題，また国際企業ネットワークとしての問題点などを豊富な経験にもとづいて率直に話してくださった．

社員食堂で従業員の皆さんとまったく同じ昼食（大変結構でした！）を食べさせてくださるなど，行き届いた配慮と，視察団一同の旺盛な知識欲を充分に満たす充実した時間を過すことができた．

CECOIA 2

CECOIA…発音すれば，セコイア．日本語として聞けば，こせこせした小さな感がある．しかし，この会議の組織委員のメンバーをみれば，Hertz, Lesourne, 松田武彦，Müller-Merbach, Pierskalla, 等々，IFORS の会長や元会長がずらりと顔をならべている他，認知心理学者の Kahneman, DSS の Zeleny, 生産管理の Falster 等，実に錚々たる顔触れである．

CECOIA は "Conférence de l'Économique et l'Intelligence Artificielle" の略称であり，今日の経済・経営をめぐる，必ずしも明確に定式化し得ない問題を，情報ネットワーク，ＤＳＳなどを含む広い意味での人工知能という技術的方法との連係においてとらえようという意図で，1986年にフランスで始められたものであり，今回はその第2回である．言葉をかえれば，従来のＯＲや経営学のみならず，社会，政治，文化，倫理なども視野に入れた，高い視点に立って実践的方法を展開しようとするものである．また，プログラムから見るところ，米国カーネギー・メロン大学のサイモン教授の考え方が強い影響を与えているようであった．

セッションの中にも，DSS, Intelligent System, Organizational Engineering, Expert System Evaluation 等がみられ，さらに，パネル・ディスカッションのテーマとして，Group Decision & Negotiation Support Systems がとりあげられて，盛んな討論が行なわれていた．

今回，200名程度の小規模な学会ではあったが，参加者の約半分がフランス人で，英語＝フランス語の同時通訳があるとは言うものの，完全とはいえず，多くの日本人にはよく理解できない点も少なくなかった．しかしながら，特にフランス人のものには，概念構成がしっかりとしたものが多く，この点が高く評価された反面，概念論に終始しているという見方から，批判的な目を向ける米国からの参加者もみられた．

3) 帰　国

こうして，全日程を終えた一行は7月9日パリを発ち10日成田に到着，解散した．旅行中，宿舎の一部に火災が起こったり，スリの被害にあったり，空港管制官のストライキがあったり，小さなトラブルは続出したものの，いずれも大事には至らず，旅程に色彩りをそえたのみ．密度の濃い，多くの時間が記憶に残った．

© 日本オペレーションズ・リサーチ学会．無断複写・複製・転載を禁ず．